

時潮の流転

(昭和十四年寮歌)

望月真三郎君 作歌
竹村伸一君 作曲

一

時潮の流転 涼々と
四季乾坤に巡り立つ
去来常なく人変り
有情無為の時鐘の音に
孤城の爽春は未だ浅し

二

遠く流離の春に来て
此の高楼に春愁ひつつ
郭公鳥の鳴くさへも
多感の児等の情懷熱く
懷古の涙溢るべし

三

真日澄む北の蒼穹はるか
飛燕ひとたび音に鳴けば
桃李の華影は瘦せゆきて
あはれ旅寝の若き遊子よ
帰南の郷愁しきりなり

四

夕陽西に落ち行けば
白樺林朱に染み
暮秋の颯は飄々と
時艱を憂ふ国の子の
悲腸の声に似たるかな

五

北斗地平に揺曳ぐとき
天地の四大霜と凝り
四寮の高夢も凍てつきて
ほがらほがらの朝ぼらけ
帰雁の孤影よ月に飛ぶ

六

明日別れ行く旅人の
春の夕べの宴遊かな
かへらぬ絢夢をしのびつつ
生命の故郷と慨嘆きしも
すでに三星霜の草枕